

2025. 3月卒業時アンケート結果

外国語学部

属性

Q1.

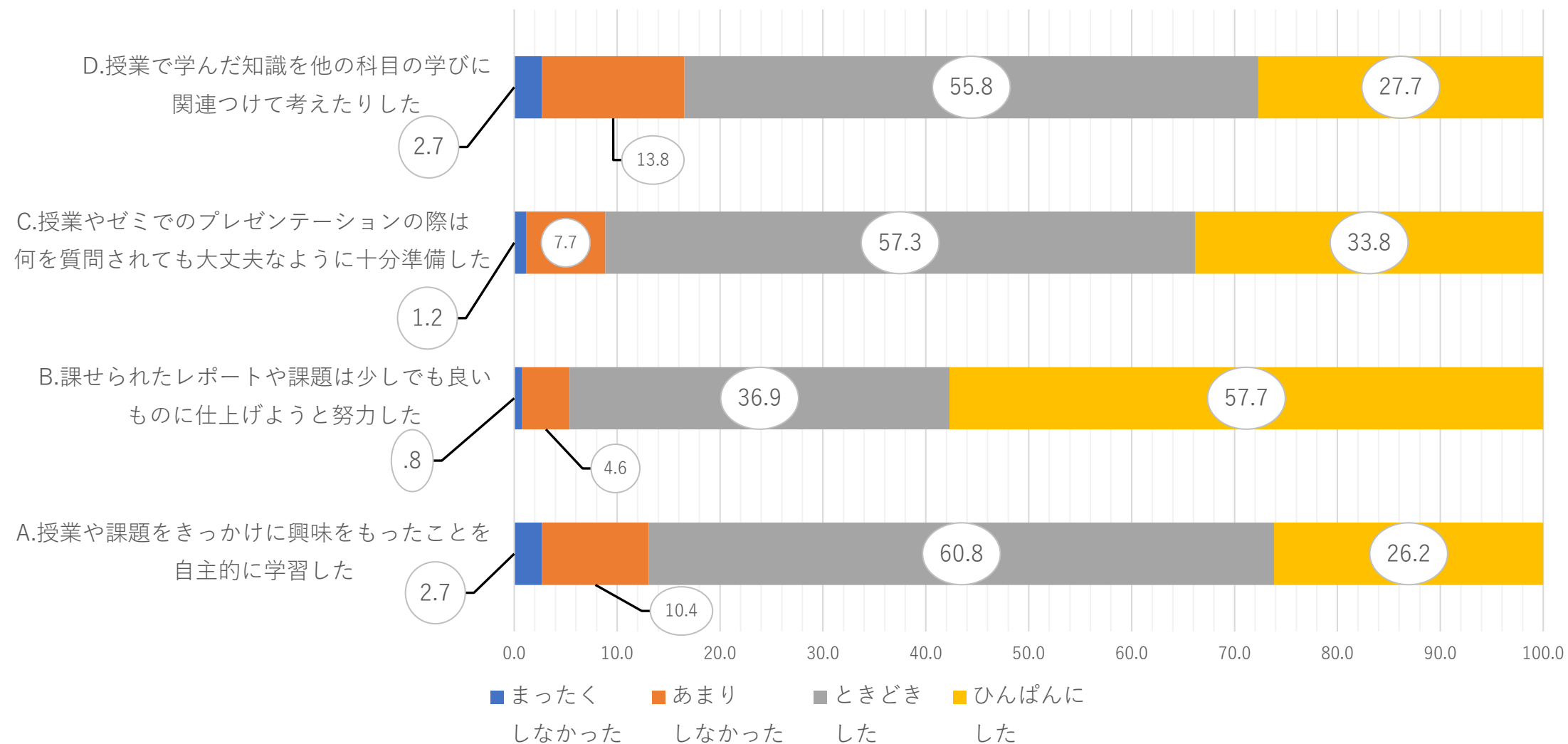
	n	%
男	85	32.7
女	175	67.3
合計	260	100.0

Q 2.

	n	%
英語学科	152	58.5
中国語学科	23	8.8
観光交流文化学科	85	32.7
合計	260	100.0

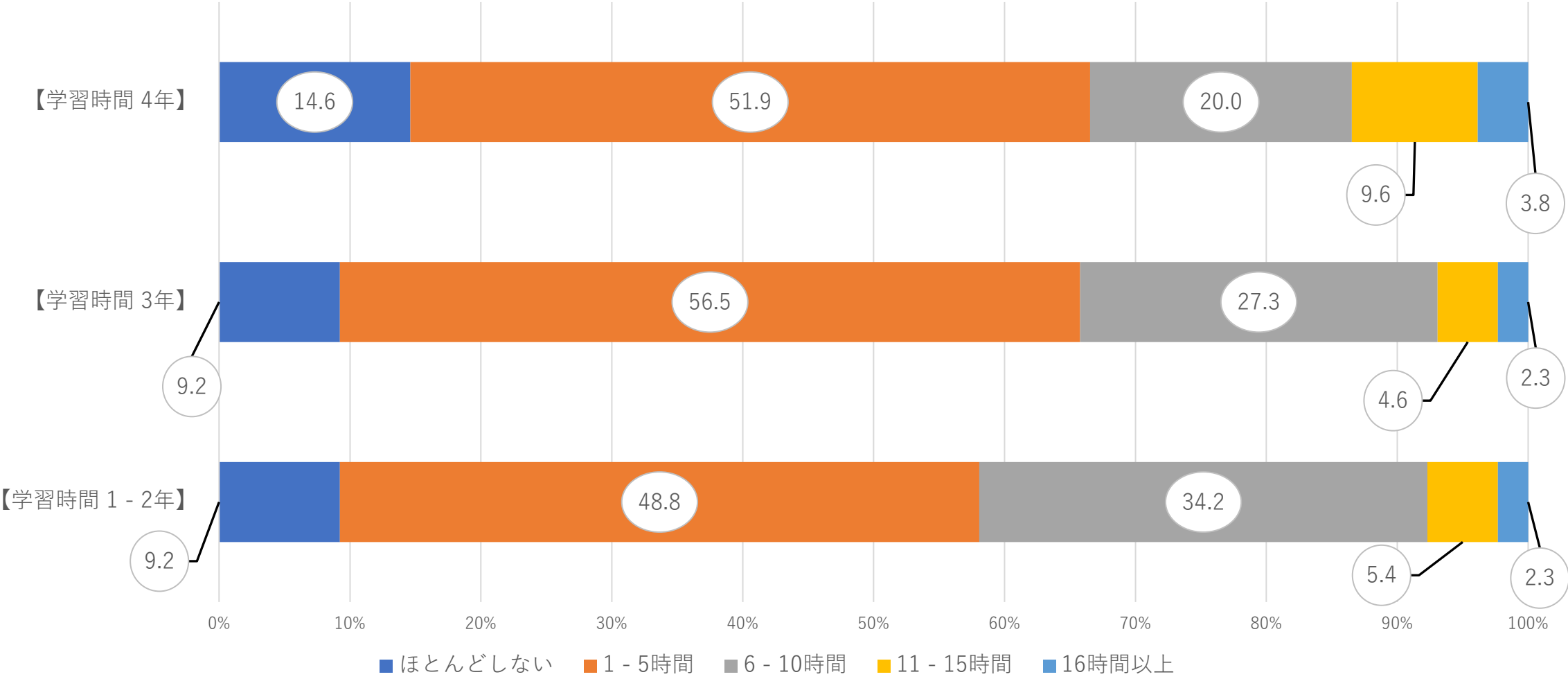
Q3.あなたは大学の授業や課題などの学習に関して、次のようなことをどのくらい取組みましたか。
(A～D)

単位：％



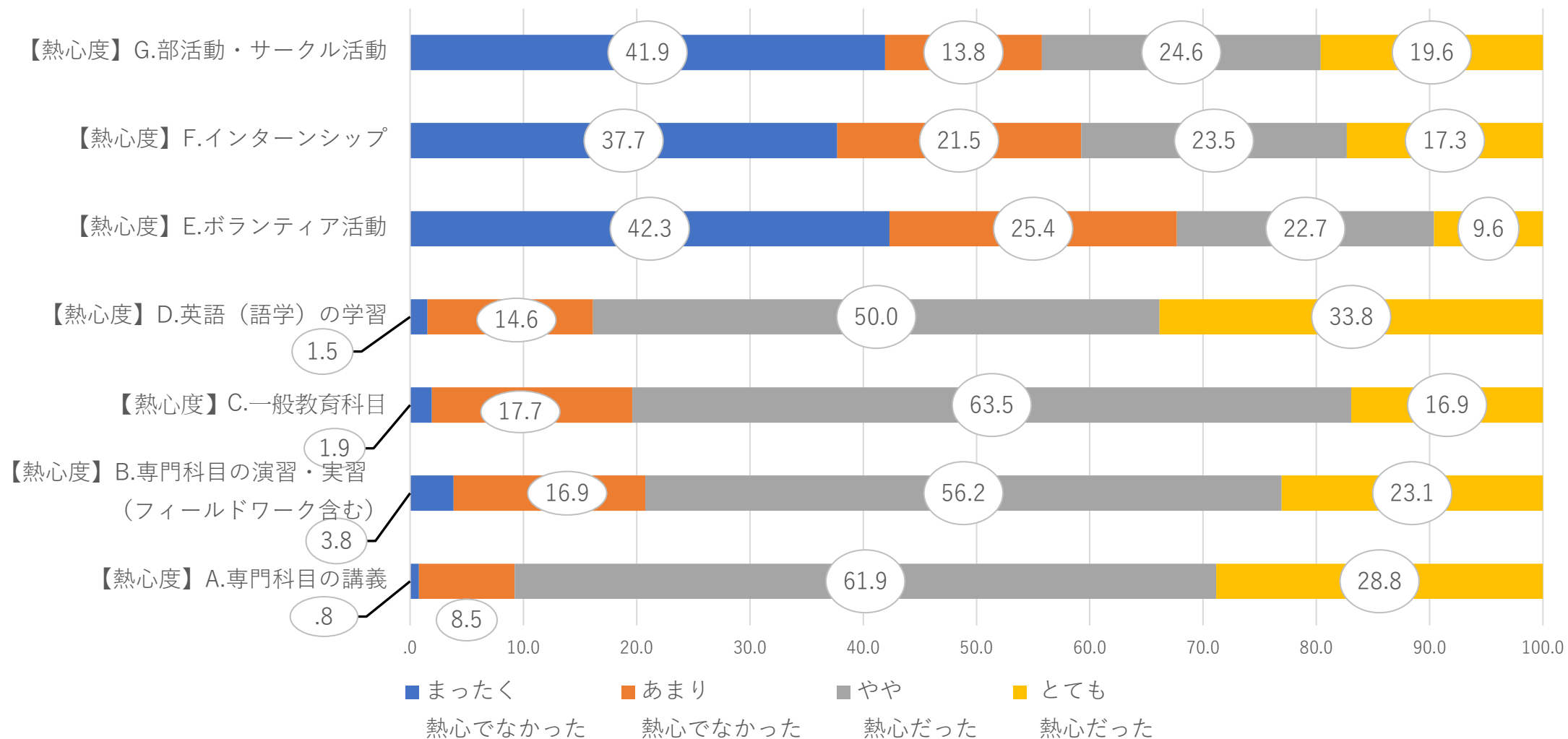
Q4.あなたは大学の授業への出席以外に、一週間あたり平均して何時間ほど「自学自習（予習・復習・課題
など授業やゼミに関する学習）」をしましたか。

単位：％

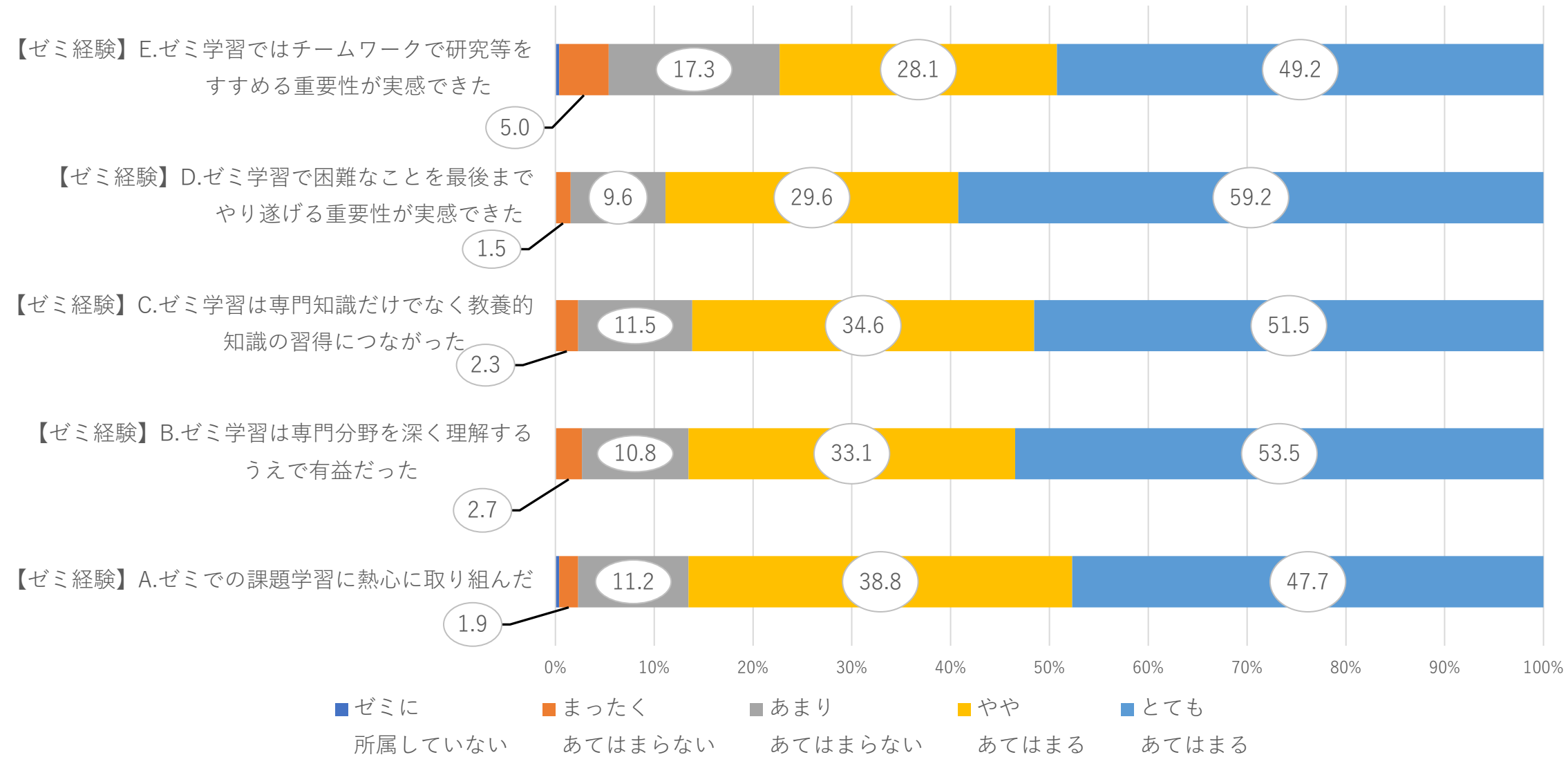


Q5. あなたは在学中に、次の活動にどの程度熱心に取り組みましたか。（A～G）

単位：％

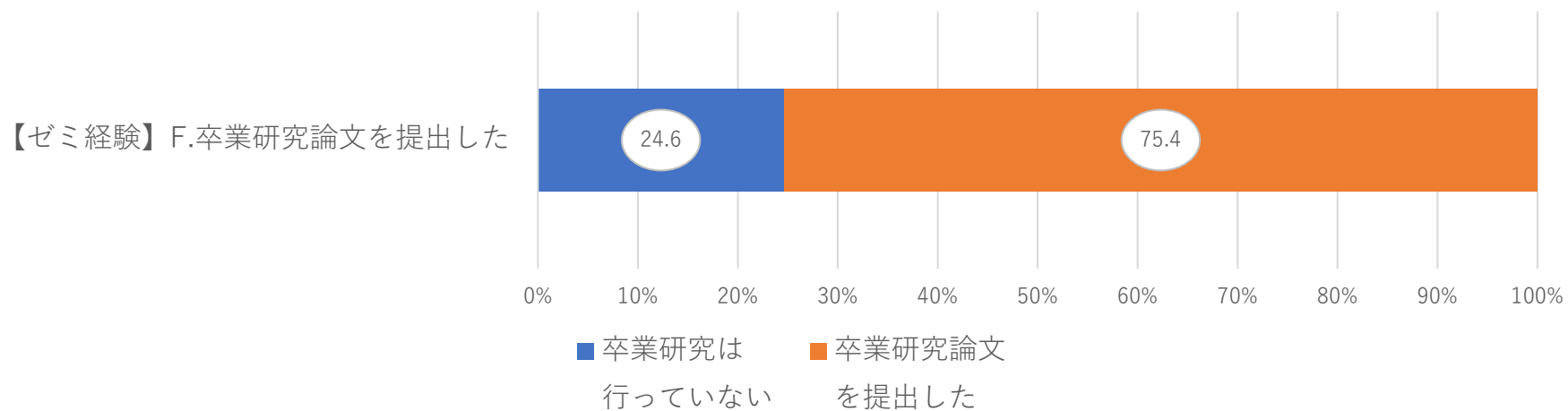


Q6. ゼミでの学習を振り返って、次のことからはどれくらいあてはまりますか。(A～F) ※Fは次ページ
単位：％



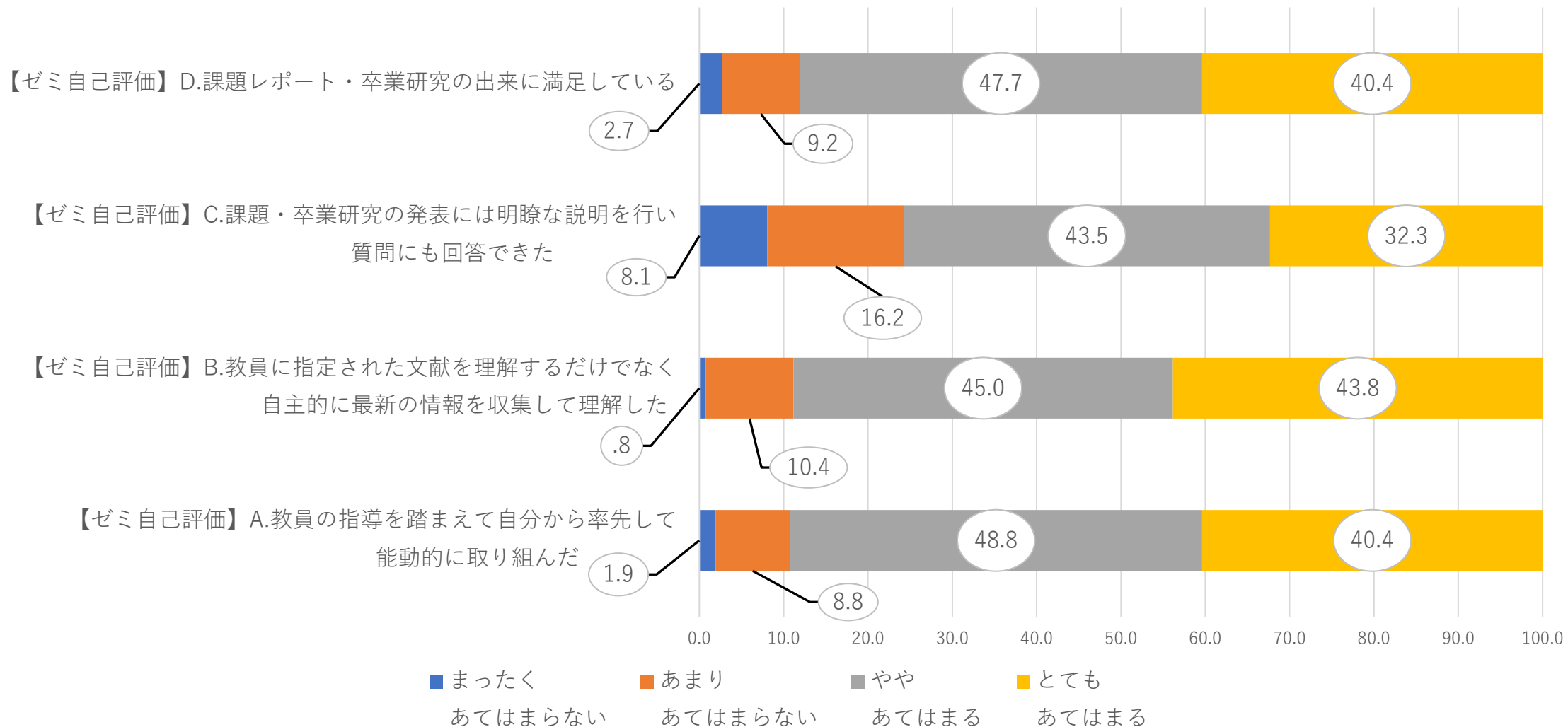
Q6. ゼミでの学習を振り返って、次のことがらはどれくらいあてはまりますか。(F)

単位：％



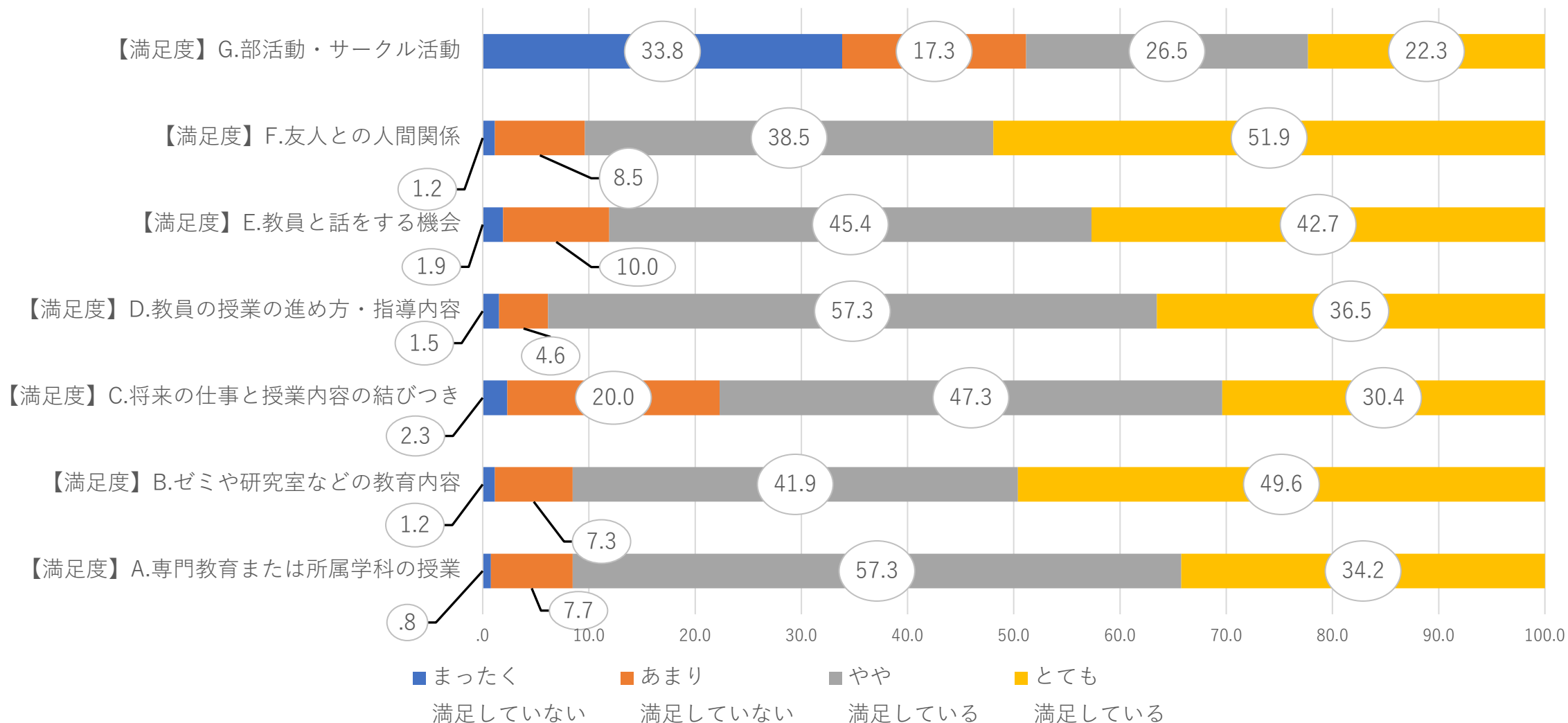
Q7. ゼミでの学習や卒業研究の実施内容・評価について、あなたの経験を評価するといずれにあてはまりますか。（A～D）

単位：％



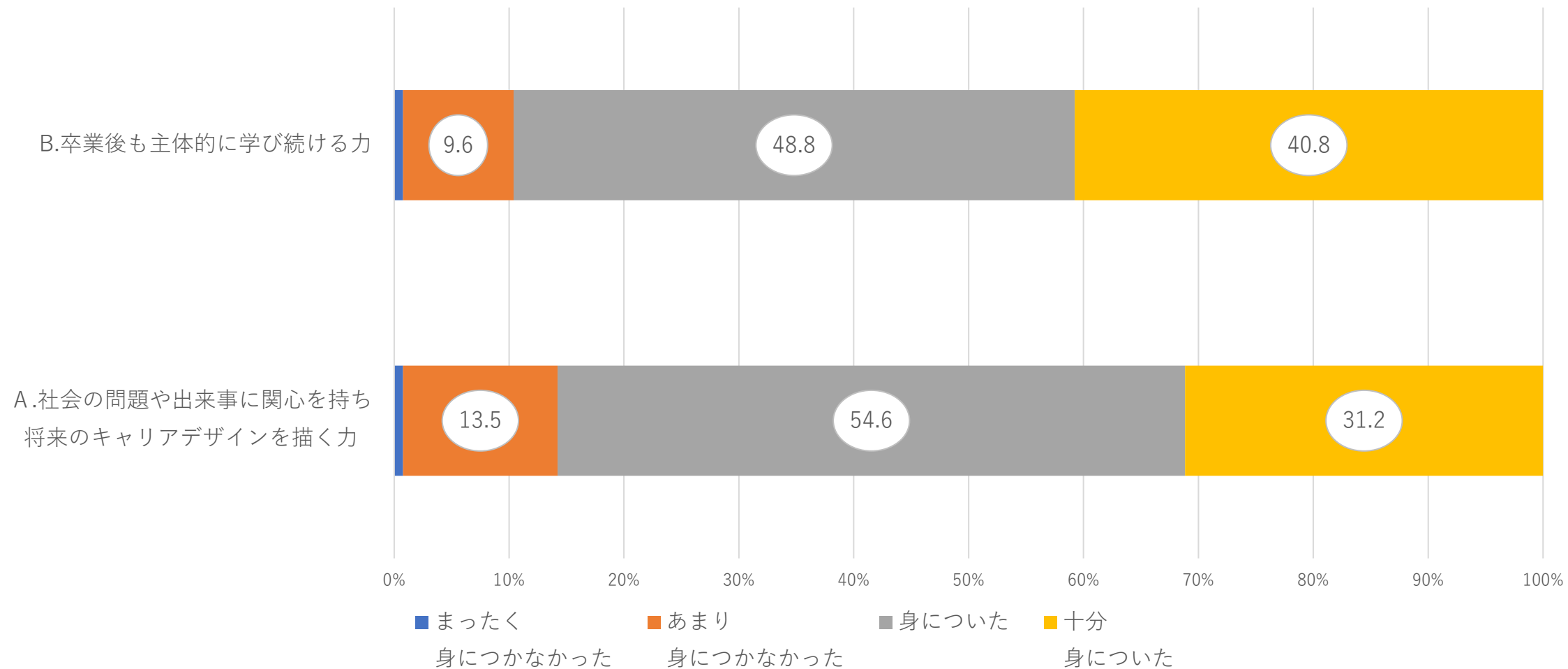
Q8. あなたは大学で教育内容や学生生活にどの程度満足していますか。（A～G）

単位：％

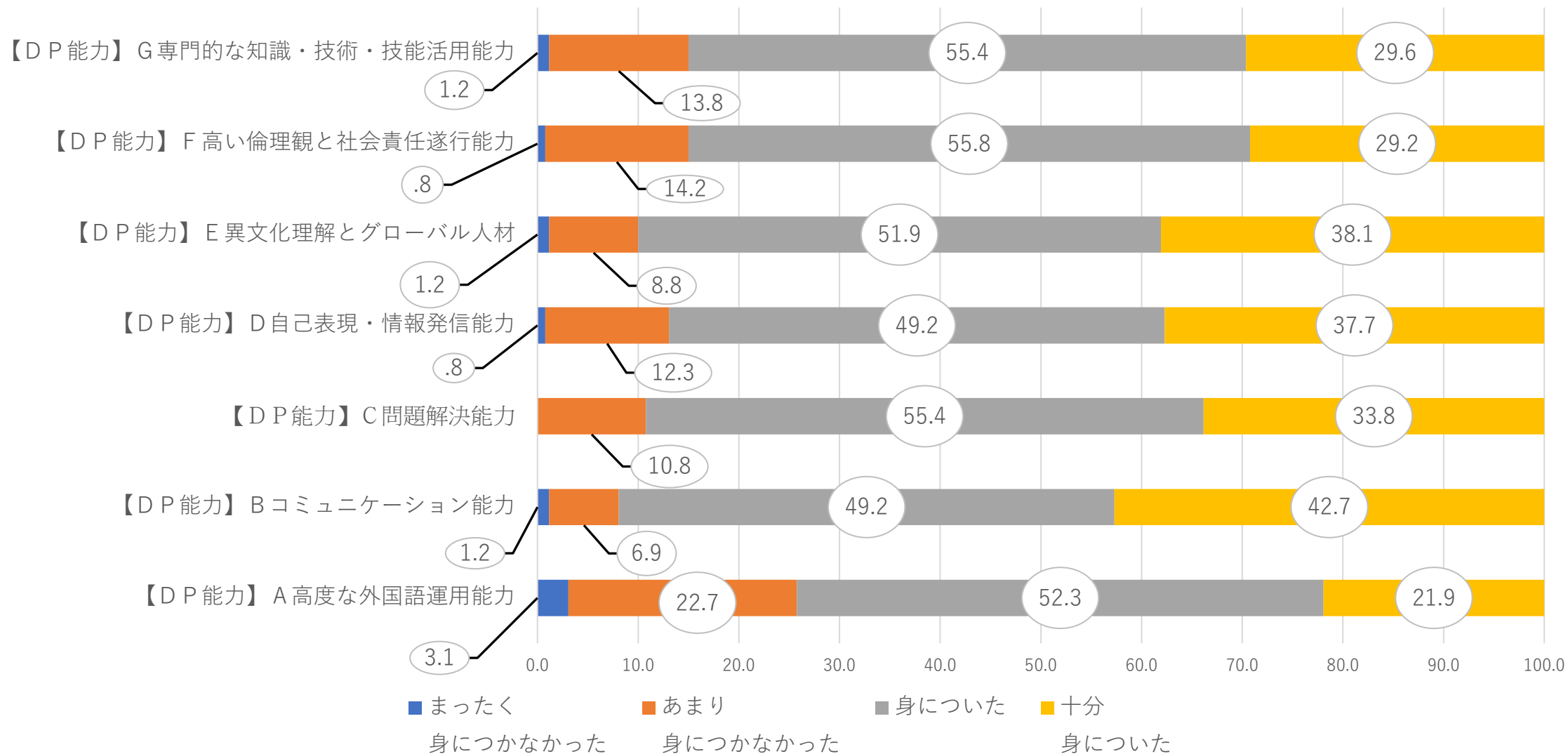


Q9. あなたは在学中に、次の力をどの程度身に付けたとおもいますか。（A～B）

単位：％



Q10. 外国語学部が定めるディプロマ・ポリシー能力（DP能力）をどの程度身につけましたか。（A～G）



総評：外国語学部

2025年度の卒業時アンケートは回答者数260名(前年度197名)であり、学科構成では英語学科の比率が49.0%から58.5%に上昇した一方、中国語学科は14.1%から8.8%、観光交流文化学科は36.9%から32.7%へと低下した。母集団構成が変化しているため、以下の経年比較はこの点を踏まえて解釈する必要がある。

学習行動の面では改善が顕著であった。自学自習時間について「ほとんどしない」と回答した割合は、4年次で32.6%から14.6%、3年次で18.1%から9.2%、1・2年次で18.4%から9.2%と、いずれの学年でも半減した。11時間以上取り組む学生の割合も4年次で5.2%から13.5%(11-15時間9.6%+16時間以上3.8%)に増加しており、学習時間の分布は全体として前年度より長時間側に大きくシフトした。また、部活動・サークル活動への不熱心層(まったく・あまり熱心でなかった)は61.8%から55.8%に減少し、ディプロマ・ポリシーの「コミュニケーション能力」が身についたとする回答は89.6%から91.9%に上昇するなど、意欲・能力面でも前進が見られた項目がある。専門科目の講義への熱心度(やや・とても熱心)も89.6%から90.8%、英語(語学)学習への熱心度は83.4%から83.8%と、いずれも9割前後の高水準を維持した。

一方で、ゼミ活動への熱心度(やや・とても取り組んだ)は93.8%から86.5%に低下した。卒業研究論文の提出率は学部全体で75.4%であったが、これは卒業論文が必修である英語学科(提出率100%)と、選択科目となっている中国語学科・観光交流文化学科の差によるものである。正課外活動では、インターンシップへの不熱心層が50.3%から59.2%、ボランティア活動が63.5%から67.7%に増加した。満足度についても、友人との人間関係が97.4%から90.4%、教員と話をする機会が92.7%から88.1%、専門教育または所属学科の授業が95.8%から91.5%と、いずれも高水準を維持しつつも前年度から3～7ポイント程度低下した。「高度な外国語運用能力」が身についたとする回答は75.9%から74.2%とほぼ横ばいで、7項目中最も低い水準にとどまった。

以上を踏まえ、次年度は以下の取り組みを講じる。第一に、ゼミ活動への熱心度低下に対しては、学科会議を通じてゼミ担当教員間での情報共有を図り、今年度からIR推進室にて実施されている「授業コメントシート（授業評価アンケート）」にて状況把握を行う。第二に、インターンシップ・ボランティアへの参加意欲低下に対しては、キャリアサポートセンターと連携した早期(1・2年次)からの情報提供と参加体験の共有機会を増やし、参加することによって得られるメリットを示していく。第三に、教員との交流満足度の低下に対しては、オフィスアワーの周知強化だけではなく、直接学生と接することのできるアドバイザー面談、授業時にてサポート体制を強化し、一人一人に寄り添う形での対応を心がける。第四に、「高度な外国語運用能力」については、留学プログラムの参加率向上や、TOEIC・到達目標をカリキュラムに明示し、達成状況を年次ごとに追跡することが本年度より実施されているため、これを学生面談や授業、授業外活動を通じてフォローを行うようにする。これらの施策の効果は次年度アンケートで検証し、PDCAサイクルを継続する。